

HIGASHIOSAKA FACTORies



HIGASHIOSAKA FACTORies(東大阪ファクトリーズ)は
東大阪の多彩な技術や創意に富んだモノづくりの魅力を
国内外に広く発信することを目的としたプロジェクトです。
この地に息づく優れた技術と、新たな視点や創造性を掛け合わせ
これからの時代に適した価値を提案し、産業の活性化を目指します。

そして、ここから生まれたモノや関係性が
FACTOR(ファクター:きっかけ／因子)となり新たな価値や
未来への可能性を創造するためのプラットフォームとして活動していきます。

300年以上続く歴史と、およそ6,000もの事業所を有する
「モノづくりのまち東大阪」から、いま改めて世界へ向け
その魅力を発信します。



FACTOR 01

EXTENSION CORD

大原電線株式会社 ×

鈴木 元

EXTENSION CORD

老舗電線製造所が作る延長コード

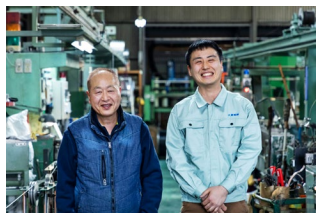
大原電線株式会社は、東大阪市で50年以上にわたり電線製造を手掛ける老舗の町工場である。近年は安い電線を海外から輸入する企業が増え、かつて東大阪に多く存在した電線工場も、現在では数社のみとなっている。大原豊一さん康行さん親子が作る電線は、高い品質と小ロットに対応できる柔軟さで業界からの信頼が厚く、大手メーカーの電気製品や最新の設備を備えた建築など、華やかな場所の裏側で寡黙に社会を支えている。東大阪で静かに生産されるこの高品質な電線が、一般の家庭でも使えるように、延長コードを作ることにした。

誠実なものづくり

この延長コードは、大原さん親子の作る電線のように、機能的で実用的である。クロスタイプとストレートタイプ、防雨タイプの3種の延長コードは、どのデザインも機能に対してまっすぐで、無駄なディテールはない。高い電圧にも対応できる高品質なVCTケーブルの径は太めだが、しっとりと柔らかいので扱いやすい。家庭や店舗、建設現場やアウトドアでの使用にも耐えられるように、電極と本体が一体成型されているので丈夫である。本体からコードまで単一の素材で作られたデザインは、実直で寡黙で、どこか愛らしい。

Designer's voice

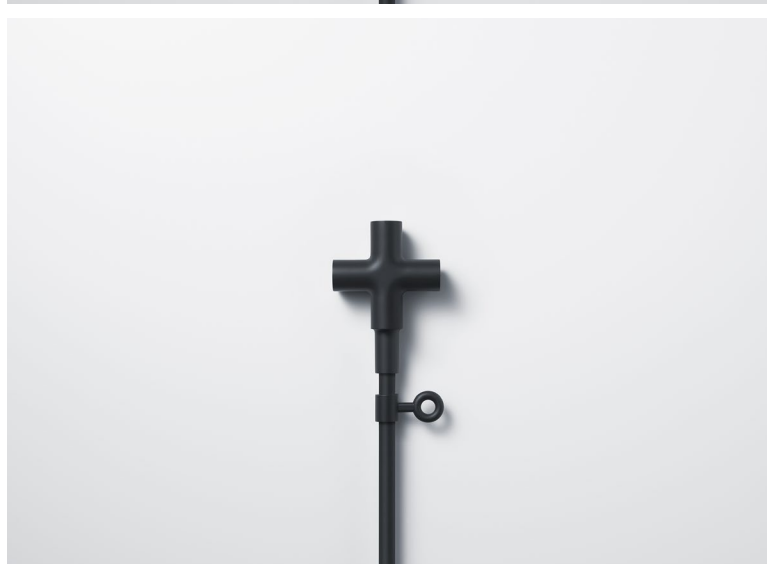
電線は社会を支える大切なインフラだが、極めて匿名的なものである。東大阪市の大原電線を訪れ、大原さん親子の職人気質のこだわりや、新しい事に挑戦するオープンさ、温かい人柄に触れてすっかりファンになってしまった。この工場で生産される電線は他で作られるものとは少し違うように感じた。電線は工芸品ではないが、作り手の個性が、匿名的な量産品にもオーラのようなものを与えるのだと思う。この工場に流れる空気、大原さんの実直さや、温かさをそのままプロダクトにしたいと思った。

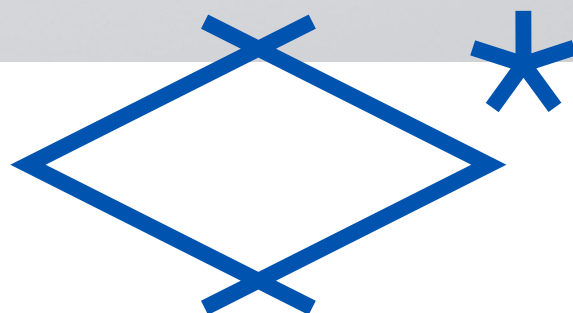


大原電線株式会社
<http://oharadensen.com>



鈴木 元
GEN SUZUKI STUDIO 代表
<http://www.gensuzuki.jp>





FACTOR 02

BENCH

共和鋼業株式会社 ×

倉本 仁

受注型から発信型のものづくりへ

共和鋼業株式会社が製造する菱形金網は、慣れ親しんだ運動場のフェンスや、落石防止のための強靱な金網など、様々な場所に用いられている。大規模な公共事業から家庭の中まで、ありとあらゆる場所に用いられる素材を製造している工場である。また、様々な種類の金網を受注し、素材として納品する傍らで、自社の金網を使った新たな製品開発にも力を入れている。それは代表の森永さんの物づくりへの挑戦的な姿勢を表すものであり、今回のプロジェクトもこの発信型の姿勢を礎に、金網を用いた新たな商品を開発することにした。

金網が持つ温もりの記憶

共和鋼業で触れた菱形金網は、冷たく無機質な金属のイメージとは違うものであった。柔らかくしなり、どこか温かみを感じる手触りと重み。それらは私たちの原体験にある、金網に手を掛けたときの感触や音やたわみのように、いつかの記憶に結びついているようであった。そのアナログな感触を楽しむことのできるモジュール式のベンチがこの「ネットベンチ」である。精緻でシャープな外観と、柔らかくしなって体を支えてくれる座面。菱形金網の製造特性を活かし自由な長さに調節して使うことができるので、用途・シーンに応じて幅広く活用できるモジュールベンチとなった。

Designer's voice

代表の森永さんに初めて会った時、真摯で穏やかな語り口調の裏側にある情熱を感じた気がした。共に過ごすようになって改めて気づかされるのであるが、仕事やものづくりに対する愛情が半端ないのである。金網を用いた自作の鞆を使い、左手には金網の自作アクセサリ。自らがまず使って金網の広告塔となる、その金網愛に溢れる姿勢をみているうちに、その熱量に当てられている自分に気づく。聞けば森永さんは会社を父から継いだ2代目だという。受け継いだモノに対する並々ならぬ決意と責任を側で見せてもらい、このプロジェクトに参加できて本当に良かったと思った。



共和鋼業株式会社

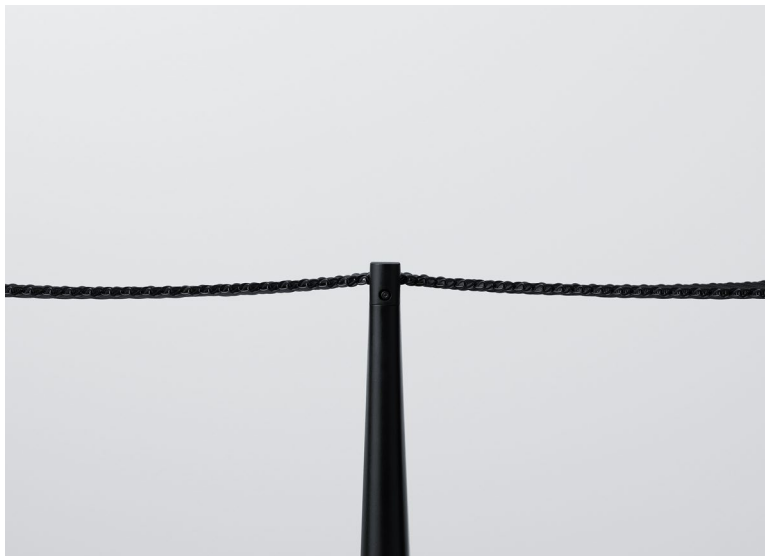
<http://www.kyowakogyo.net>

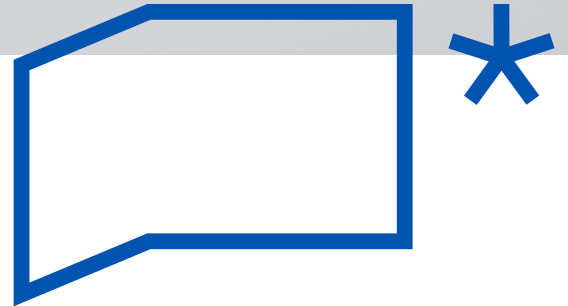


倉本 仁

JIN KURAMOTO STUDIO 代表

<http://www.jinkuramoto.com>





FACTOR 03

UNIT SHELF

株式会社仁張工作所 ×

北川 大輔

UNIT SHELF

新たな市場と定番を

仁張工作所はこれまで、インフラから公共空間、アミューズメントなど多岐にわたるBtoBビジネスシーンにおいて、それぞれの用途に特化した特注板金家具の製作を多く手掛けてきた。そこで培われた高く柔軟な対応力を活かしつつ、これまでにはなかった小売店舗やスモールオフィス、居住空間といった新たな市場の開拓とより幅広く多くの人々が触れることのできる定番品を備える、という観点から機能／デザイン／価格でそれらに応え得る新しいシステムユニットシェルフを構想した。

美しく整える

幾重にも重なる試行錯誤のもと、極限まで要素とノイズを削ぎ落とされたシェルフは、非常にシンプルであるからこそその個性を纏っている。十分な強度と収納力を持ちながら、どこまでも軽やかな印象で、あらゆる書籍や商品そして空間をも美しく整えてくれるユニットシェルフである。従来のユニットシェルフにはない、仁張工作所だからこそ可能な高い精度によるシームレスなデザインは、パーソナル／パブリックのいずれの空間にも馴染む存在になるだろう。製品の99%が板金から作られた、今までにない新たな定番となるユニットシェルフである。

Designer's voice

仁張工作所の持ち味は、スピーディでフレキシブルなものづくりを可能にするワンストップの製造環境にある。また、自らを「板金加工の専門家集団」と称する彼らの板金加工に関する知識と技術は素晴らしいに尽きる。板材を切り、曲げ、繋ぐ。その限られた工法の中で如何にして15mm厚という極薄・極細のユニットシェルフを実現するか。度重なる試作のなか、当初より条件を緩めることなく外観はほぼ変わらずに、あらゆる知恵が盛り込まれ、これまでにないユニットシェルフを実現した。その仕上がりを見たとき、「板金加工の職人集団」といっても過言ではないと思った。



株式会社仁張工作所

<https://www.nimbari.co.jp>



北川 大輔

DESIGN FOR INDUSTRY 代表

<https://www.designforindustry.jp>





FACTOR 04

METAL TREE SUPPORT

北勢工業株式会社 ×

田渕 智也



HIGASHIOSAKA
FACTORies

METAL TREE SUPPORT

技術を活かすものづくり

北勢工業は鋳造品メーカーとして上下水道をはじめ道路、電力、通信といったインフラ基盤や、樹木保護盤、車止めなど、都市の機能や景観を支えるものづくりを通し、街や暮らしに貢献してきた。今回のプロジェクトでは、都市環境における快適性や安全性を追求するものづくりを模索する中で、近年の大型台風や豪雨などの影響で注目を集めている『街路樹支柱』に着目。鋼管で作られている既存製品を見直し、鋳物を用いた製品にすることで、機能性やデザイン性を向上させると同時に、北勢工業の高い技術力をより良く表現できるようなプロダクトの開発を目指した。

製法を活かしたデザイン

鋳造の特性を活かし、1つの型から生まれるパーツ同士を連結して作る『街路樹支柱』。樹木を囲む鋳物のリングは3つの同じパーツで構成される。鋳物のパーツは、高い強度と耐久性をもつと共に、柱となる長円形の鋼管を挟み込みながら互いをボルト1本で締結する機構や、樹木を支えるベルトを通す形状を有している。これらは製品に求められる様々な機能や条件を、素材や製法の特性を活かしながら形に落とし込む検討を繰り返し行った結果である。鋳物ならではのデザインで必要な機能を十分に満たしながら、都市の景観に馴染むすっきりとした佇まいを実現した。

Designer's voice

北勢工業の強みは時代や環境の変化、社会のニーズに素早く対応したものづくりにある。公共性の高い製品に対する責任のある製品開発と信頼性の高い生産体制によって、都市の機能や景観を支える製品を数多く製造し、広く社会に貢献している。今回のプロジェクトにおいても、提案に対し建設的な議論を重ね、試行錯誤を繰り返しながらデザインを具現化する事ができたのは、長年にわたって積み重ねてきた知識や技術力に加え、暮らしを支えるものづくりへの責任と安心安全な社会への想いをもっているからこそだと思う。



北勢工業株式会社

<https://www.hokusei-kogyo.co.jp>



田淵 智也

OFFICE FOR CREATION 代表

<http://www.officeforcreation.jp>





FACTOR 05

TABLEWARE

甲子化学工業株式会社 ×

熊野 亘



HIGASHIOSAKA
FACTORies

TABLEWARE

廃棄素材への価値観を再構築する

甲子化学工業は社会の様々な場所で利用されるプラスチック部品や製品を年間1,400万個以上製造してきた。環境意識の高まりからプラスチック問題に社会が注目するなか、廃棄物を活用することに着目し、廃棄貝殻と廃プラスチック等から開発したエコ素材を活用することで、社会課題の解決に取り組んでいる。これからの社会における素材の在り方を模索する中で、エコ素材でありながら丈夫でデザイン性が向上したプロダクトを社会に発信することで、廃棄物をもつネガティブな価値観をポジティブに再構築し、環境保全のきっかけを作る取り組みをスタートした。

これからの素材を活かすデザイン

プラスチック製品の価値がひと昔前から変化した今、エコ素材に活路を見出した甲子化学工業が取り組んでいる新素材の研究開発の成果を、どの領域で多くの人に長く使ってもらえるプロダクトにできるか。そのような問いから導き出したプロダクト領域が、アウトドア用のテーブルウェアであった。SHELLTECというエコ素材の素材感、剛性、射出成形による量産性を活かし、注ぐ、持つ、重ねるという動作を機能的かつ実用的な造形に落とし込んだ。広い意味で「長く使える」という一番大切なサステナビリティが、これからの素材を活かすデザインには必要と考えている。

Designer's voice

素材探求、実直な姿勢、時代に取り残されない努力など、ものづくりに対する甲子化学工業の姿勢こそが企業そのものの強みに繋がっていると思いますが、その中でも特にマイナスなイメージをプラスなイメージに変える姿勢こそが、甲子化学工業の最大の強みなのだと思います。樹脂加工という今の時代にはネガティブなイメージをもたれやすい分野を、尽きることのない好奇心と技術力で突き進む姿勢に、デザイナーとして何ができるのかと、逆に刺激をいただいております。次の世代に、どのような樹脂製品を残していくべきか。引き続きデザイナーとして少しでも南原さんのお役に立てれば光栄です。

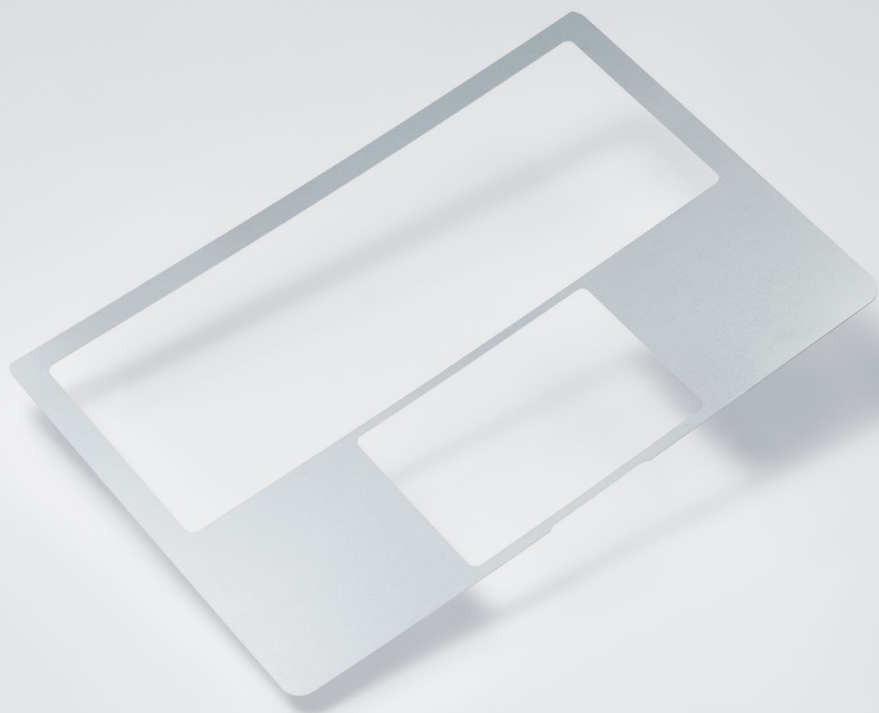


甲子化学工業株式会社
<https://koushi-chem.co.jp>



熊野 亘
kumano 代表
<https://watarukumano.jp>





FACTOR 06

PC ACCESSORIES

株式会社サンコー技研 ×

今井 裕平



HIGASHIOSAKA
FACTORies

PC ACCESSORIES

唯一無二の打ち抜き加工で自社製品に挑戦

サンコー技研は、東大阪市で50年近く打ち抜き加工を生業にしてきた企業である。中でも、厚み1mm以下の半導体や金属素材に対する超高精度の打ち抜き加工を得意とし、独自開発した工法は特許も取得している。代表的な実績は、誰もが知る交通系ICカード。内部の超極薄フィルム基盤の加工は、サンコー技研が単独で担当している。累計1億枚以上出荷しているにも関わらず、不良品ゼロ。その品質力も強みのひとつである。今回は超高精度の打ち抜き加工を活用した自社製品の開発に挑戦。自社の技術力がより多くの人に伝えられるフラッグシップ製品を目指す。

世界最薄のMac向けアクセサリ

これまで業界向けに加工を行ってきた企業が、突として消費者向けに完成品を開発するのは容易なことではない。あくまで加工に徹しながらも、消費者向け製品として販売することを考え、完成品ではなく付属品「アクセサリ」に狙いを定めた。コンセプトは、世界最薄のMac向けアクセサリ。デスクトップPCやノートPCの表面をホワイトボード化する「金属製スキンシール」を開発した。極薄の金属をPCの形状にぴったり合うように打ち抜き、その表面に独自のコーティングを施すことで、ホワイトボードマーカーで直接書いてイレーザで消すことができる。

Designer's voice

私が最も感銘を受けたのは、DXアプリを開発し販売まで手掛けられる、代表 田中さんの常に挑戦し続ける姿勢である。その田中さんが磨き上げた最高峰の「打ち抜き」技術をどうすれば世界にアピールすることができるのか。考え抜いた末にたどり着いた答えが「Mac向けアクセサリ」だ。Macの精度に遜色ない、むしろ貼っていることすら分らない超高精度でアクセサリを実現することで、「Appleに比肩するクオリティ」という実績と看板の獲得に共に挑戦したいと考えた。この新たなゴールを目指して、1億人のユーザに向けた新たなフラッグシップをつくりあげていきたい。

○Macは、Apple Inc.の商標です。



株式会社サンコー技研

<https://sankogiken.com>



今井 裕平

株式会社 kenma 代表
<https://www.kenma.co>





FACTOR 07

DRAWSTRING TOTE BAG

株式会社文殊 ×

小関 隆一



HIGASHIOSAKA
FACTORies

DRAWSTRING TOTE BAG

丸編みニットならではの新たなものづくり

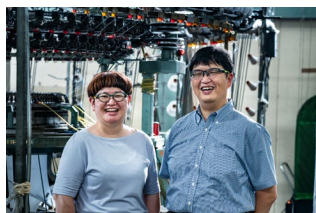
文殊が企画から製造を担う丸編みニットは、丸編み機特有のループが螺旋状に繋がる構造と、用途に合わせた糸の組み合わせにより、しなやかな柔軟性と心地よい伸縮性を持つ生地である。この特性を活かし、これまではレディースインナーを中心とした衣料品で、人々のカラダに寄り添って来た。今回のプロジェクトでは、衣料品とは異なる新たな分野で、丸編みニットならではの特性を活かし、新たなカタチで人に寄り添うモノづくりに挑戦する。文殊初となるオリジナルブランドでもある事から、新たなビジネスモデルに取り組む第一歩となる。

ありふれたもの／ありふれていないもの

丸編ニットの柔軟性と伸縮性を活かした、複数の袋が連結する巾着。生地が伸縮するため容量は大きく、インナーバッグ、あるいはトートバッグのように日用の場面で使用できる。普段から旅行時の移動や収納に様々な数や大きさの袋物を活用しているが、一方でどこに何を収納したか分かりにくくなる。そのストレス緩和のために一つにまとめる方法がないかと考えるところから着想を得た。サイズや色を展開しやすいことも布製品の楽しさかもしれない。袋物は既に無数のデザインが存在するが、現代のライフスタイルに提案し得るものとして可能性を感じている。

Designer's voice

布は人類が最も長く寄り添ってきた素材の一つ。安価に製造普及できるようになったのは比較的近代からとはいえ、布にまつわるプロダクトは既に発明され尽くされているとも言えるだろう。文殊さんが作る丸編み生地は人肌で触れる普遍的なやさしさを感じられるもの。あまりにも身近なこの素材の魅力をどのように知ってもらえるか、真剣に向き合っている姿に感銘を覚えた。その姿勢に応えるべく素材を素直に利用し、現代の生活に適合でき、さらには文殊さんがビジネスとして今後の展開も考えられるようにプロジェクトを包括的にデザインするように心がけた。



株式会社文殊

<http://kimura-knit.co.jp>



小関 隆一

RKDS 代表

<https://ryuichikozeki.com>



HIGASHIOSAKA FACTORies

<https://ho-factories.com/>



Project Direction: Maki Hirakawa

Creative Direction: Daisuke Kitagawa

Art Direction + Design: Ken Okamoto, Yamato Iizuka (Ken Okamoto Design Office Inc.)

Photograph : Kenta Hasegawa, Mitsuru Sakurai

〒577-0011 東大阪市荒本北1丁目1番1号

東大阪市役所都市魅力産業スポーツ部モノづくり支援室

E-mail: monodukuri@city.higashiosaka.lg.jp

Tel: 06-4309-3177 月曜日～金曜日の9:00～17:30 (祝日、年末年始を除く)